筑波学院大学紀要第11集　95 ～ 113 ページ　　2016年

＜研究ノート＞

神聖ローマ皇帝カール４世の自叙伝
－翻訳と註解（5）－

小松　　進*

The Autobiography Written by Holy Roman Emperor Charles IV:
Translation into Japanese and Commentaries (5)

Susumu KOMATSU *

１．はじめに

14世紀前半に企てられたチェコ国王ヨーハンのイタリア遠征は、しばしば、向こう見ずで大胆不敵な冒険と評される。予め周到に練り上げられた形跡がなく、成否の見通しも立たぬ間に決行され、いわば一か八かの賭けという様相を呈した点で、確かにそれは我々の目に、結果を顧みぬあまりにも無謀な企てと映る。しかも、それはルクセンブルク家の勢力拡大政策でヨーハンが常に拠り所としてきた行動規範を逸脱する企図であり、ヨーハン自身にとっても未知なる危険な挑戦だったのである。

自分の子供たちや近親者をヨーロッパ各地の宮廷に送り出してルクセンブルク勢力の強力なネットワークを構築しようとした婚姻政策にしても、チェコ王家が継承した歴史的権利を振りかざし東ヨーロッパ地域で大規模に展開した家領拡大政策にしても、ヨーハンが政策の根底に据えたのは血統権による正当性の確保と維持であり、現実政治におけるその貫徹と具現であった。こうした血統権に基づく支配の正当性の追求こそ、家門勢力拡大政策でヨーハンが拠り所にした行動規範だったのである。ところが、この野心家のイタリア遠征で際立つのは、こうした正当性の完全な欠如である。血統権に裏打ちされていないイタリアへの支配圏拡大は、ヨーハン個人の力量とその支配を受けるイタリアの諸都市国家コムーネの思惑によって成否が左右される。しかし、異邦から来た支配者を迎え入れるイタリア各地のコムーネの去就は定まらず、それゆえ、ヨーハンのイタリア支配は脆弱で、決して永続性をかちえることができなかった。こうしたヨーハンのイタリア政策の顛末と蹉跌を綴るのが、カール４世の自叙伝の第４章から第７章までで、今回訳出するのはその遠征の行方が決定的な局面を迎える第５章と第６章である。それぞれの章の梗概は、以下のとおりである。

第５章
　・サン・フェリーチェ城砦前の戦い

＊　筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

・モンテ・カルロ城砦の構築
・味方陣営内におけるカールに対する密謀
・ヨーハン率いる援軍の到来
・パヴィーア攻防戦とベルガモ奪取作戦

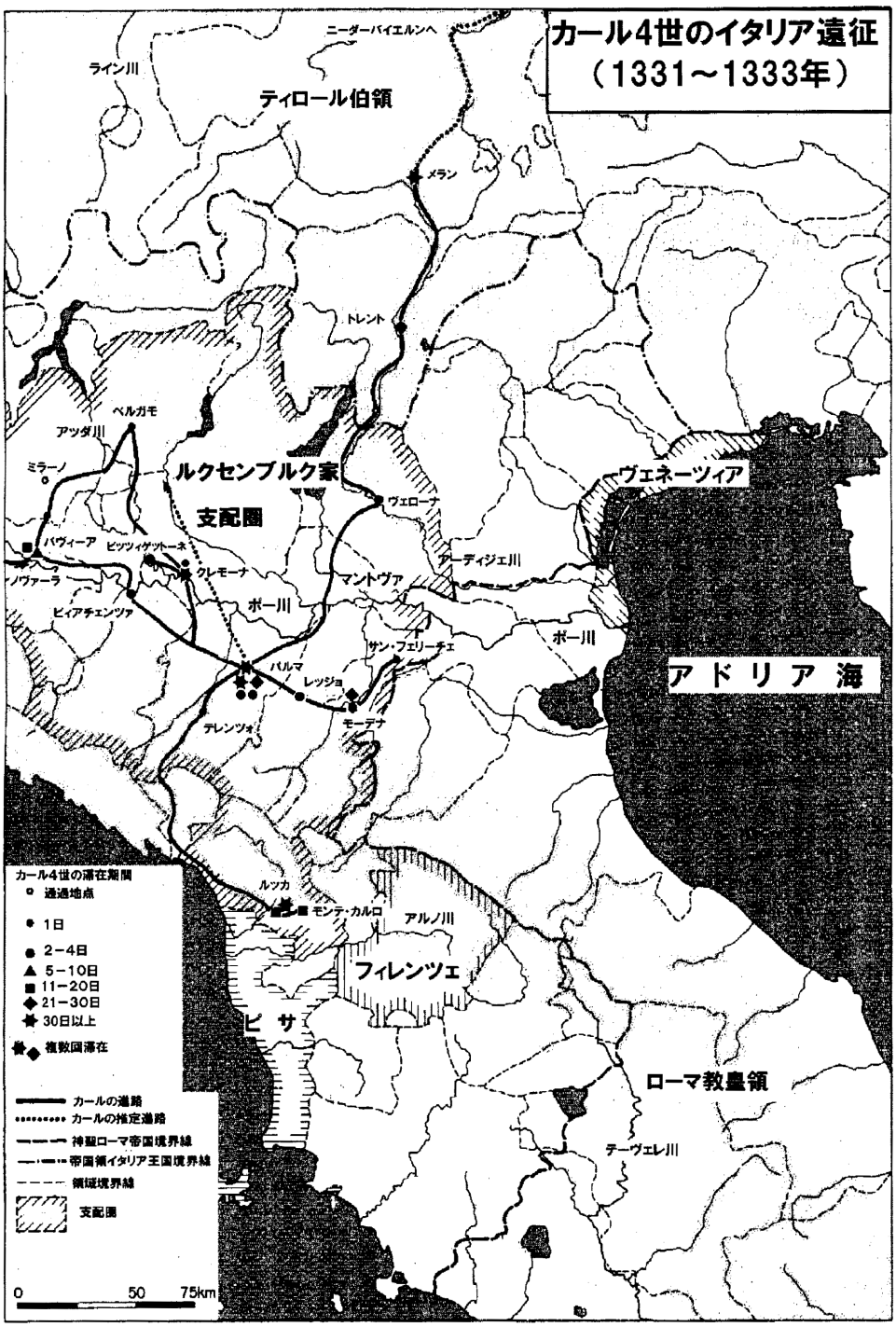
第６章
・ヨーハンと教皇特使の同盟
・クレモーナ市とピッツィゲットーネ城砦をめぐる攻防
・パヴィーア城砦失陥
・教皇特使軍の大敗
・ヨーハンのイタリア退去

ヨーハンのイタリア遠征は、束の間のエピソードに終わった。さながらけたたましく高々と夜空に放たれ、瞬時にして爆音とともに華々しく散っていく打ち上げ花火にも似て、それはかりそめに時人の耳目を集めても、やがては歴史の彼方に忘れ去られていくあだ花のような出来事であった。だが、大胆不敵で破天荒な大博打とも言えるヨーハンのこのイタリア遠征によって、その嗣子カールは人生で初めて現実政治の舞台に放り出され、そこで繰り広げられる権力闘争の渦中では父王ヨーハンの名代として獅子奮迅の働きを見せる。このカールが綴る自叙伝のイタリア転戦記は、父王のイタリア遠征に関して当事者自身が遺した最も詳細な記録であり、迫真に充ちた生々しいその叙述は、歴史の彼方の闇に埋もれたこの遠征に光を当て、後世の我々にその実像をまざまざと甦らせてくれる。

ヨーハンのイタリア遠征に関する当事者自身の記録として、カールの体験記は無類の史料的価値をもつ。しかし、当事者の視線は、往々にして自分の体験した一つひとつの個別の出来事に集中し、その出来事が置かれた全体的な脈絡にまで及ぶことがない。カールの叙述も例外ではない。たとえば、ヨーハンはいかなる意図の下にイタリア遠征に着手したのか。それをイタリア諸都市はいかなる思惑をもって迎えたのか。ヨーロッパの諸勢力はそのイタリア遠征にどのように関わったのか。こうした点について、カールは何も語らない。つまり、カールの叙述から、出来事の細部は知りえても、イタリア遠征の全体像はなお明らかにならないのである。本稿では、自叙伝の第５章と第６章を訳出するとともに、その叙述の背後に蠢く諸勢力のさまざまな思惑や実情に目を向けながら、当時のヨーロッパ政局の脈略の中で、ヨーハンのイタリア遠征の全体像を浮き彫りにしてみたい。

２．自叙伝第５章（翻訳）

折しもくだんの共謀者たち、すなわち、ミラーノ人、ヴェローナ人、フェッラーラ人、マントヴァ人が、わが方の都市モーデナの前に精鋭軍を結集し、６週間にわたってその地に滞陣した。６週間が経ち、モーデナ、レッジョ両市の司教区とコンタード[1]を蹂躙したのち、連中はそこを引き払い、戦力と軍勢をモーデナの司教区にあるサン・フェリーチ城砦前に集結させた。そして寄せ手の滞陣が長期に及ぶと、城兵は寄せ手との交渉に応じ、ひと月以内に、つまり、その期限が切れる聖カタリーナの日[2]までに、われらが寄せ手から城砦を救出しなければ城砦を明け渡すことに同意したのである。しかしながら、パルマ、クレモーナ、モーデナ、レッジョの人々はこれを耳にするや、自分たちの兵力を結集して、余の許に馳せ参じ、「殿下、全滅するのを待つより、われらの破滅を先に食い止めましょう」と進言した。即刻この進言を容れ、われらは戦場に繰り出して陣を構えた。パルマ市を発ちその城砦に辿り着いたのは聖カタリーナの日、すなわち、城砦が敵軍の手に明け渡されることになっていたまさにその日のことであった。９時課[3]になるやならぬかの頃合、甲冑兵[4]1200と歩卒



Ellen Widder: Itinerar und Politik. Studien zur Reiseherrschaft Karls IV. südlich der Alpen. Köln 1993, S.536. の地図をもとに作成

6000を擁して、われらはほぼ同数かこちらを上回る敵軍に戦いを挑んだ。戦いは九時課に始まり、日没後まで続いた。

両陣営とも軍馬のほぼすべてと馬匹を少なからず失い、われらは壊滅寸前で、余の跨がる軍馬さえも打ち斃されてしまった。味方に助け起こされたものの、このようなありさまであり、しかもわが方が敗色濃厚なのを見て取り、余は今や絶体絶命の窮地に立たされたことを悟った。しかるに、まさしくその時だ。敵兵が軍旗をひっさげて潰走し始めたのである。まずマントヴァ人が戦場に背を向け、しまいには敵兵の大半がその後を追った。こうして神の恩寵により、われらは敵から勝利を収め、逃げ惑う甲冑兵800を捕虜にし、歩卒5000を打ち取ったのである。かくてこの勝利により、サン・フェリーチェ城砦は解放された。

この戦いで、余は屈強の兵(つわもの)200とともに、騎士に叙任された。その翌日、われらは戦利品と捕虜を伴って、意気揚々モーデナに凱旋した。そしてわが兵士たちは解散し、余はパルマに引き返した。当時パルマにこそ、余の宮廷があったからだ。

その後、余はトスカーナのルッカへ赴き、フィレンツェ人たちとの戦いに備えて、とある山の頂に城下を囲壁で守られた立派な城塞を築いた。その山はルッカからヴァルディニエーヴォレ[5]の方角に10マイル離れた地点にあり、われらは城塞をモンテ・カルロと名づけた。こうした準備をしたのち、そこの差配をピストーイァのシモーネ・フィリッポ殿に託し、われらはパルマに帰還した。シモーネ・フィリッポ殿はかねてよりわが名において見事な采配を振るい、ガルファニャーナ[6]の町バルガを敵どもから奪い取り、他にもその指揮下に数々の勲功を立てていたからである。さてわれらがパルマに着くと、敵陣営が四方八方から猛然とわれらを攻め立ててきた。だが冬の厳寒がわれらに幸いした。寒気あまりにすさまじく、誰しも戦場に踏みとどまることができなかったからである。

その頃である。かたやヴェローナ人やわが敵どもと、マルシーリオ・デ・ロッシ、ギベルト・ダ・フォリアーノ、マンフレーディ・デ・ピーイとの間に、謀議がめぐらされ始めた。この３人は、パルマ、レッジョ、モーデナの実力者で、それぞれの都市の支配者にも等しい人たちであった。そしてさらに、この面々はレッジョ司教区のさる小さな教会でヴェローナ人の特使と落ち合い、余に対する密議をこらし、余を裏切って互いに結束しようとした。彼らはキリストの御聖体にかけて誓約し密謀を確かなものにしようと思い、ミサを挙げさせた。ところが、椿事が出来した。司祭が秘蹟を行なっていた折しも、そのミサで御聖体の奉戴がすむや、一陣の風が激しく渦を巻いて教会をすっかり闇にとざし、一同を恐怖に陥れたのである。明りが再び燈されると、司祭は自分の前の祭壇にキリストの御聖体がないことに気づいた。すると一同は打ちひしがれて、ただ呆然と立ちつくすばかりであった。そのような状態で互いに顔を見交わしていると、主の御聖体はマルシーリオ・デ・ロッシの足元に見つけ出された。この人こそ、この度の策謀の首謀者であり、それを教唆した張本人に他ならない。さてその折、一同は口をそろえて、「われらの企てようとしたことは、神のお気に召さないのだ」と語り合った。こうして密謀は破棄され、面々のいずれもが自分の都市へと戻って行った。その折、ミサを執り行なった司祭はレッジョ市に赴き、起こったことを司教に報らせた。司教はこの司祭をオスティアの枢機卿[7]の許に送った。枢機卿はその当時ロンバルディーアに遣わされていた教皇特使で、ボローニャにいた。さらに枢機卿と司教は、レッジョ市における余の名代でフランス生まれのジル・ド・ベラレール[8]にその一件を告げ知らせた。この度の密謀のことを余が警戒するように、

名代があらかじめ警告を発するためである。しかし、あのように陰謀をめぐらそうとした面々は心を改め、これまでにもまして誠実に余を援け、何一つ心に隠し事をせず、兄弟さながらにゆるぎなく余の許に踏みとどまることになった。ある日のこと、フォリアーノ家七代目のギベルト・ダ・フォリアーノは、打ち明けたものだ。「かりに主の御聖体がマルシーリオ・デ・ロッシの足元にあったように、それがしの足元にでも見つけ出されたとすれば、心が晴れることなど決してありえないでしょう。幸いにして、あのようなことをしてはならぬように、神御自身がそれがし一同のために配慮して下されたのです。あのようなまねをするくらいなら、死んでしまう方がましというものです」と。しかし、余はあたかもその件につき何も知らぬかのように、黙したままその場をやり過ごした。

その間に、わが父は、敵どもによって余が窮地に追いやられていることを聞き及び、フランスで大軍を集めた。その先頭に立ったのは、ボーヴェ司教[9]、フランス王国の元帥たるウー伯[10]、サンセール伯で、他にも数知れぬ伯や領主たちが名をつらねた。軍勢はフランスからサヴォーイァに至り、そこからアルプスを越えてモンフェッラート辺境伯領に抜け、辺境伯領からロンバルディーアを突っ切ってクレモーナへ、クレモーナからパルマへと進軍した[11]。甲冑兵の数はおよそ1600で、この大軍がわれらの加勢に駆けつけたのである。

それから、父は集結した軍勢を率いて、パヴィーア城砦の救援へと向かった。パヴィーア城砦はわが名を奉じて、これまでパヴィーア市そのものと敵対していたのである。われらは陣を構えて、パヴィーア市を包囲した[12]。甲冑兵はゆうに3000にのぼっていた。われらは都市郊外と郊外の修道院を破壊し、救援に駆けつけたパヴィーア城砦に兵糧と兵を新たに補充して、城砦を増強した。だが、その城砦を通しても、パヴィーア市を奪取することはできなかった。というのも、市民たちが都市と城砦との間に壕と堡塁をめぐらし彼らへの侵攻が阻まれたからであり、さらにはミラーノ人から甲冑兵1000が援軍としてパヴィーア市民たちに送られていたからでもある。10日間滞陣したのち、われらはその地を引き払いミラーノ近傍に陣を設けて、ミラーノのコンタードとその従属領域を劫略した。さらにそこからベルガモへと転進した。ベルガモではわれらに通じた者たちと密議をこらし、その者たちが市門の一つをわれらのために開け放つ手筈になっていたのだ。払暁にわが兵士のある者たちが侵入し、それから大部隊の一つが彼らのあとに続いて侵入し、その日のうちにわが父が余とともに全軍を率いて押し寄せるまで都市を確保しておくという段取りであった。事はそのように運び、ベルガモ市でわれらに与する者たち、すなわちコッレオーニ家の人々が門を開けて、わが先発隊は市内に入った。ところが、いかなる思惑があってかは知らないが、後続部隊がそれに続こうとしなかったのだ。そこで、予定通り市内に入っていた先発隊も、自分たちだけでは敵に対抗することができず、市外に撤収した。われらに味方した市民の多くも先発隊とともに落ちのびたが、あとに取り残された者たちは捕えられて城壁に吊るされた。その数は50を下らない。わが父は余とともに間近まで押し寄せていたのだが、事の顛末と命令の無視を見て、全軍もろとも周章狼狽するばかりであった。

数日後アッダ川を渡り、クレモーナ領を経て、われらはパルマ市に戻った[13]。

３．自叙伝第６章（翻訳）

この後、わが父はボローニャにいたオスティアの枢機卿の許に赴いた。猊下は御名をベルトランと言い、当時、教皇座からロンバ

ルディーアに遣わされていた特使で、その頃、ボローニャ市のほかに、ピアチェンツァやラヴェンナのようなあまたの諸都市、それにロマーニャ全域とアンコーナ辺境伯領を支配していた。この枢機卿と父は協議し、猊下がわれらと盟約してわが敵たちと対決することを取り決めた[14)]。というのも、猊下は聖庁と自身のために以前からフェッラーラの支配者と敵対し、フェッラーラの支配者はわが敵たちと同盟して相互に助勢し合う構えを見せていたからだ。その枢機卿はわれらに兵と戦費の支援を約し、特使自身も時を同じくして敵たちに対し軍勢を集め、フェッラーラ市の郊外に陣を構えた。その軍勢の指揮を執ったのは、のちのアルマニャク伯[15)] である。

やがてその年の夏、聖霊降臨祭が過ぎた頃[16)]、わが父も大軍を集め、まずは余を甲冑兵500とともにパルマからポー川を越えてクレモーナ市へと先発させた。この軍勢を余はピッツィゲットーネ城砦前に遣わした。城砦がクレモーナ司教区に属していたにもかかわらずクレモーナ市そのものとわれらに歯向かい、パヴィーア人とミラーノ人に忠節を誓って敵陣営に与していたからだ[17)]。余自身は、わずか甲冑兵20とともにクレモーナ市にとどまった。するとにわかに敵兵が増強され、その数は日に日に増していき、城砦前にいた寄せ手の方が壕で自分たちの守りを固め、わが救援を待たざるをえなくなった。その時である。マントヴァ人とフェッラーラ人が不意に艦船をポー川に浮かべてクレモーナの手前に送り、クレモーナの領土内でポー川上にあった船舶をことごとく沈めてしまったのである。こうして、わが父は全軍を率いてわれらの救援に駆けつけることも、使者を遣わすことさえもできなくなった。敵が船舶のみならず、浮き水車をもことごとく沈めて引き上げたからである。ほんのわずかな手勢とともにクレモーナ市に残った余自身も、日ごとに都市と住民の破滅を目の当たりにしつつあった。この都市そのものが広すぎ、しかも、当時、度重なる抗争でほとんど荒廃しきっていたからである。父は余を、余は父を救援することができず、二人ともピッツィゲットーネ城砦前に陣取った味方を救出することもできずに、われらの窮状まさに極まったその時である。ポー川ぞいにクレモーナ市を包囲していた敵どもが仲間割れを起こし、互いに罵り合ってそれぞれ自分の都市へ引き上げてしまったのだ。これを知るや、わが父はパルマからポー河畔に兵を繰り出し、川底から船を引き揚げさせ、こうしてわずかな手勢とともにクレモーナ市へと渡った[18)]。翌日、軍勢が一つに合流し、われらはピッツィゲットーネ城砦前にいた味方の救出へと進軍した。そして神の恩寵により、われらは著しく勢いを増し、敵の全兵力を凌ぐまでに増強された。すなわち甲冑兵の数は、3000に脹れ上ったのである。

しかし、その城砦前であたら時を費やしても益なしと判断すると、われらは先述したパヴィーア城砦の救援に転進することを図った。ところが敵はこれを察知し、軍使を立ててわが父に偽りの交渉を持ちかけ、次のような休戦協定を結ばせた。戦場から父は撤兵するが、休戦期間中はパヴィーア城砦に兵糧を補充するという協定である。敵は補給の邪魔立てはしないと父に保証し、巧みにへつらいの言葉をあまた並べて父にそれを約束したのであった。そこでわれらは撤収し、わが兵士たちを各都市、各地方へと戻らせた。しかるに、それからも敵どもは休戦も協定も一向に守らず、約定どおりパヴィーア城砦に兵糧を補給することを許さなかったため、ついにパヴィーア城砦は敵の手に落ちてしまった。こうして、わが父とその軍勢は、へつらいの言葉と偽りの約束に乗せられて、戦費と物資に窮することになったのである。しかも冬が到来し、戦場にとどまることさえできなくなっていた。かくて、「用意万端整った者が、時

宜を逸するは、百害あって一利なし」という警句どおりの結果を、われらが招いたことは明らかだ。

一方その頃、フェッラーラ人、ヴェローナ人、マントヴァ人、ミラーノ人が戦力を増強し、フェッラーラ近郊に陣取っていた教皇特使軍の総指揮官アルマニャク伯を捕虜にし、その軍勢の多数を打ち取り、残兵をポー川に沈めて、特使軍を完膚なきまでに叩きのめしてしまった[19]。そのため、特使猊下はこの上さらに軍を立て直し、再び敵たちに対して陣営を維持する気力を失い、この地を後にすることを余儀なくされた。

わが父も、戦費が底をつき戦争を継続することが不可能であるのを見て取り、ついにこの地を去り、土地生え抜きで各都市の有力者たちにこの地のことは委ねることを決めた[20]。すなわち、パルマはロッシ家の人々に、レッジョはフォリアーノ家の人々に、モーデナはピーイ家の人々に、クレモーナはポンヅォーニ家の人々にである。これらの人々は各都市の支配権をわが父に委ねていたのだが、父はそれを返すことにしたのである。ただしルッカ市はフィレンツェ人に売り渡そうとした。しかし、父は余と自分の顧問たちの助言を聞き入れ、パルマをすでに委ねられていたロッシ家の人々にルッカをも託すことにした。

４．イタリア遠征におけるヨーハンの意図

カールの自叙伝において、チェコ国王ヨーハンのイタリア進出は唐突に始まる。1330年秋、ヨーハンはケルンテン公にしてティロール伯たるハインリヒ６世の許を訪れ、その相続娘マルガレーテ（マウルタシュ）と自分の次男ヨーハン・ハインリヒとの婚儀に立ち会い、そこからさらに南へと足を伸ばしてトレント市に辿り着いた。そのトレントに逗留していた折、チェコ王国から王妃エリシュカの訃報がもたらされたが、ヨーハンが帰国せずにそのままトレントに留まっていると、その年の暮、ロンバルディーアの諸都市が次から次へとヨーハンに服属するに至った[21]。カールのこうした簡潔な記述から、ヨーハンがイタリア支配に乗り出した真意を読み取ることはできない。また、この時のヨーハンの心底にあった思惑を窺い知る史料も、他に存在しない。しかし、終生ルクセンブルク家の勢力拡大に奔走したヨーハンにとって、イタリア進出もやはりその拡大政策の一環であったことは疑いない。問題は、その政策の対象が、なぜイタリアであったかという点である。

ヨーハンにとって、イタリアは格別な思いを抱かせる土地であった。ヨーハンの父ハインリヒ７世はローマでの皇帝戴冠を目指してイタリア遠征を企て、詩人ダンテの熱烈な歓迎を受けながらも、その征旅の途上、マラリアで不慮の死を遂げ、その遺骸は遠征に同行してやはり病魔に斃れた皇妃マルガレーテとともにピサ大聖堂の墓所カンポサントに安置された（1313年）。イタリアは父母の眠る土地であり、ヨーハンが生涯を通じて追求したのは志半ばでイタリアの地に客死したこの父帝ハインリヒの事業を引き継ぐこと、すなわち、ドイツの王位を再びルクセンブルク家の手に取り戻し、さらにイタリア平定を成し遂げて神聖ローマ帝国の帝冠を頭上に戴くことであった。ヨーハンが政治人生のすべてを費やした家門勢力の拡大政策は、この究極の目的を実現するために遂行され、1330年の暮に始まるイタリアへの支配圏拡大も、こうした遠大な構想の下に企図されたものと推測される。

それを裏付けるのが、その数年前にヨーハンが構想した帝国三分の計である。ハインリヒ７世客死後に実施された国王選挙で、ヨーハンは立候補を断念したが、その後も王位と

帝冠への野望を捨て去ることはなかった。ハインリヒの後継者となったバイエルンのルートヴィヒ４世とアヴィニョンの教皇庁が激突し、帝国領イタリア（イタリア北部）で権力の空白状態が生じた時、1324年、ヨーハンは思いもよらぬ帝国三分の計を構想して、国王と教皇との抗争に介入した。それは、ドイツをルートヴィヒが支配し、帝国の一部であるアルル王国を教皇庁の後ろ楯となっているフランス王家が領有し、帝国領イタリアと皇帝位獲得権はヨーハンが手中に収めるという案である[22)]。これはヨーハン一人の勝手な夢想にすぎず、この時点でそれを実現するだけの実力と条件を全く欠いていたため、結局は絵に描いた餅に終わった。しかし、この構想はイタリアと皇帝位に対するヨーハンの強い執着を物語るものとして注目に値する。

帝国三分の計が実現可能性の全くない夢物語に終わって以降、ヨーハンの関心は本領たるルクセンブルク伯領の経綸とチェコ王国を取り巻く帝国東部や東ヨーロッパ地域における家門勢力の拡大に向かった。そのヨーハンの関心を再びイタリアへと引き寄せたのは、異端と宣告され破門に処せられたルートヴィヒ４世が、アヴィニョンの聖庁に歯向かい、自力でローマでの帝冠獲得を目指してイタリア遠征（1327 ～ 1330年）を企てた出来事である。この遠征中にイタリアで苦戦を強いられたルートヴィヒは、アルプスの彼方にいたヨーハンに来援を要請した。この要請に応えてヨーハンはイタリア進出の準備工作を行なったが[23)]、ヨーハンの到着を待たずしてルートヴィヒが急遽アルプスの北に兵を帰したため、その工作は無駄に終わった。だが、ルートヴィヒの救援要請が、ヨーハンの胸中に眠っていたイタリア支配の野望に再び火をつけた。しかも今回は、その野心を実行に移すだけの実力と条件をヨーハンは具えていた。

ルートヴィヒがイタリア遠征に忙殺される間隙をついて、ヨーハンはチェコ王国の北方に隣接するシュレージエン（シロンスク）地方をポーランド王国から掠め取ってそこへの宗主権を確立し、ルクセンブルク家の家領を著しく拡大させた。一方チェコ王国の南方では、自家薬籠中の物としていた婚姻政策と訪問外交を巧みに展開し、ニーダーバイエルン大公ハインリヒ２世と自分の長女マルガレーテとの成婚を実現させ（1328年）、さらには、ケルンテン公にしてティロール伯の相続娘マルガレーテ（マウルタシュ）と次男ヨーハン・ハインリヒとの婚儀をも成功させ（1330年）、チェコ王国からイタリア北部へと至る地域に自家の勢力圏を築き上げた。こうしてルクセンブルク家のネットワークに組み込まれたニーダーバイエルン大公はヨーハンに忠実な娘婿として義父にイタリア進出への通路を提供し、いずれルクセンブルク家が相続する予定のティロール伯領はアルプスの山中にあって峻険な山嶺越えを容易にするいわばイタリアへの跳躍台ともいうべき要衝に位置していた。かくて、今や家領拡大で実力を蓄えたヨーハンがイタリア支配に乗り出す前提条件は整った。イタリアの野を眼下に睥睨するアルプス山中の跳躍谷に立って、あとは野望の実現に向けて跳躍台を踏み切るだけであった。

ティロール伯領のインスブルックで次男ヨーハン・ハインリヒの婚儀を祝った後、カールの叙述によると、ヨーハンはトレントに進み、そこへの逗留を故意に長引かせた。ヨーハンがトレントにあえて長居した真意は、定かではない。あるいはイタリア進出への好機を虎視眈々と窺っていたのかも知れない。しかしその好機は、思わぬかたちで到来した。当時の史料によると、ロンバルディーアのブレーシャ市からヨーハンの許に使節が訪れ、都市の支配権をこのチェコ国王に委ねてきたのである。党争に敗れてブレーシャを追放された者たちがミラーノのヴィスコン

ティ家と結託してこの都市を脅かし、市民たちがヨーハンに庇護を求めたのである[24)]。こうして、ヨーハンによるイタリアへの大跳躍が始まる。

ヨーハンのイタリア遠征は、たまたま思いつくがまま企てられた無思慮な冒険ではなかった。それは、この野心家の胸中に長らく秘められていた宿願の実現であった。だが、その実現の機会が十分な準備を整える暇もなく唐突に訪れ、それゆえ、年来の構想は成否の見通しが立たぬ間に慌ただしく決行された。だから、ヨーハンによるイタリアへの勢力拡大は、久しく構想されてきたものの、その決行にあたっては一か八かの大博打という様相を呈したのである。

５．帝国領イタリアの情勢

装甲騎兵400余りと必ずしも大軍とはいえない軍勢を集め、ヨーハンはアルプス山中の跳躍台を踏み切り、ロンバルディーアの平原に降り立った。そのイタリア初見参は、鮮烈で華々しかった。ブレーシャを皮切りに、ベルガモ、クレモーナ、レッジョ、モーデナと帝国領イタリアの諸都市が相次いでヨーハンの支配に服し、遠くトスカーナのルッカもその服属都市に名をつらねた。ロンバルディーアの雄ミラーノさえ、表向きはヨーハンの支配を受け入れたのである[25)]。しかし、当時の帝国領イタリアは、ヨーロッパ諸勢力の利害が錯綜し、一歩踏み誤ればたちまち致命傷を負いかねない地雷原さながらの修羅の巷と化していた。とりわけヨーハンの前に険しく立ちはだかったのは、帝国領イタリアにおける支配の正当性という難問である。この難問をめぐって、ヨーロッパ中世の二大勢力、すなわち教皇と皇帝が、激しく火花を散らし、時あたかも両者の抗争が白熱して烈々と燃えさかる火中に、向こう見ずにもヨーハンは足を踏み入れることになったのである。

ザクセン王家のドイツ国王オットー１世がイタリア遠征を繰り返し、962年にローマで皇帝に戴冠され、いわゆる神聖ローマ帝国（この名称が登場するのは15世紀以降）が成立して以来、ロンバルディーアやトスカーナなどのイタリア北・中部は帝国領イタリアとしてドイツ王権の支配に服した。10・11世紀にヨーロッパ経済が目覚ましい復興を遂げると、帝国領イタリアはフランドル地方と並んでこの復興を先導するヨーロッパ経済の一大中心地となり、東方貿易の拠点としてピサやジェーノヴァなどの沿岸都市が栄え、物資の行きかう交通の要衝にはミラーノやフィレンツェなどの内陸都市が発展した。11世紀後半以降、これら諸都市では住民たちの選出するコンソリが市政を運営する都市共同体が形成され、イタリア北・中部にこうして簇生した都市共同体は、ドイツ王権の支配下にありながらも、実質的には半ば自主独立の自治権を行使するコムーネ（自治都市）として帝国内に特異な政治的組織体を築き上げていく。経済的繁栄で潤い帝国から分離する傾向を強めていくイタリア諸都市の動静を前にして、アルプスの彼方のドイツ王権はただ手を拱いてそれを座視する筈もなく、やがてその自立化を阻止し、都市の潤沢な財力を王権強化の資金源に利用しようとする企てに乗り出す。その政策が本格化するのがシュタウフェン王家の時代で、12世紀後半から13世紀前半にかけて、同家のフリードリヒ１世バルバロッサとその孫フリードリヒ２世は王権に直属する役人を派遣してイタリア諸都市の直轄支配を目論んだ。イタリア諸都市はドイツ王権によるこうした自治侵害に反発し、ロンバルディーア同盟などの都市同盟を結成してシュタウフェン家の皇帝と激しく武力衝突を繰り返す。この抗争の過程で、1183年にコンスタンツの和約が締結された。この和約は、イタリア史の画期をなす。事実上行使されていたイタリア諸都市の自治権が、帝国の公法上でも

正式に承認されたのである。和約後も戦争は続くが、シュタウフェン家は和約で認めた既成事実をくつがえすことはできず、帝国領イタリアを直轄支配しようとするその野望は潰えた。

シュタウフェン家の断絶後、ドイツでは実質的に国王が不在の大空位時代（1256～1273年）が到来し、その混乱が収束したのちも、イタリア北・中部ではその統治を本来担うべき国王不在の時代がしばらく続く。この不在が常態化した13世紀後半、帝国領イタリアに対するドイツ王権の支配は、有名無実化する。しかし、ドイツ王権という軛からの解放は、イタリアに必ずしも平和と安寧をもたらさなかった。アルプスの彼方なる共通の敵の消滅は、むしろ、都市国家コムーネを分立割拠させ、コムーネ相互間の利害の衝突、さらにはコムーネ内部の権力闘争を加速させた。つまり、ドイツ王権の失墜は、コムーネ間、あるいはコムーネ内部の紛争を調停して曲がりなりにもある一定の秩序と安定をもたらす上級裁判権力の消失をも意味したのである。こうして、帝国領イタリアは政治的な秩序を失い、強大なコムーネが中小のコムーネを軍事力で圧伏して呑み込んでいく弱肉強食の時代、コムーネ内部の権力闘争に敗れて故郷を追われた流浪者が巷に溢れる政争の時代に突入していく。こうした流浪者の一人がフィレンツェを追放された詩人ダンテで、イタリアにおける秩序と平和の恢復を願うダンテの呼びかけに応じるかたちで、およそ半世紀ぶりにイタリア遠征（1310～1313年）に乗り出したのがヨーハンの父ハインリヒ７世であった。しかし、ハインリヒはローマでの皇帝戴冠を実現したものの、イタリアにおける秩序と平和の確立という遠大な目的は達成することなく客死し、むしろ、その遠征によって帝国領イタリアにおける食うか食われるかの抗争をさらに助長する結果を招いたのである。

ハインリヒの急逝後、イタリアにおける混乱の収拾と安寧の恢復という事業を引き継いだのは、アヴィニョンの教皇庁であった。1314年にハインリヒの後継者を決める国王選挙が実施され、それはバイエルンのルートヴィヒ４世とオーストリアのフリードリヒ美公が対立国王として並び立つ二重選挙に終わった。両者の対立はドイツ国内の諸侯をルートヴィヒのヴィッテルスバッハ陣営とフリードリヒのハプスブルク陣営へと真っ二つに引き裂き、両陣営の角逐は10年近く続く。こうした分裂は当然のことながら対立する二人の国王の視線をドイツ国内に釘付けにし、両者の関心が及ばぬ帝国領イタリアは再び正規の支配者を欠く無秩序な政治的混沌へと放置された。この混沌はコムーネ間の弱肉強食を増幅させ、わけてもミラーノのヴィスコンティ家とヴェローナのデッラ・スカーラ家に勢力を大幅に拡大する絶好の機会を提供した。イタリア北・中部の中小コムーネは強力な庇護者を持たぬまま、両家の貪欲な野望の餌食となり、その存立を脅かされていく。強者が弱者を併呑していく無法状態を目の当たりにして、ドイツ王権に替わり騒乱を鎮めて平和を確立する調停者とし名乗りをあげたのがアヴィニョン聖庁の２代目教皇ヨハネス22世である。ドイツにおける1314年の国王選挙が二重選挙に終わり、二人の対立国王のいずれもが相手を打倒して国王権力を十全に掌握する見込みが立たない状況の中で、ヨハネス22世は帝国領イタリアへの積極的な介入を決意する。ヨハネスはまず２人の教皇特使を派遣して、説得と交渉による平和の実現を試みた[26)]。それが不調に終わると、1317年、ヨハネスは帝国の情勢を根底から揺さぶる教書を発布する。それは、ハインリヒ７世の長逝後、帝国は空位であり、その空位期間中は教皇が帝国代理として皇帝の世俗的支配権を行使するという異例な教書であった[27)]。これにより、二重選挙に終わった1314年の国王選

挙は無効とされ、二人の対立国王の王権は正当性なきものとしてその行使が完全に否定されたのである。ここに、帝国における支配の正当性をめぐる教皇と皇帝の闘争が勃発する。ヨハネスがこの要求を現実に適用したのは帝国領イタリアにおいてで、教皇は皇帝名義で公職を保持していた者たちに破門の威嚇をもってその公職の放棄を強要した[28)]。そして、ヨハネスはさらなる決定的な一歩を踏み出す。1319年、正当なる支配権の保持者としてヨハネスは武力による帝国領イタリアの平定を決断し、それを遂行するためにベルトラン・デュ・プジェを教皇特使に任じ、即座に教皇軍をイタリア北部に送り込んだのである。この特使軍の前に立ちはだかったのが、ミラーノの僭主ヴィスコンティ家であった。ロンバルディーアの野で一進一退の攻防を繰り返しながら、1323年、教皇軍はミラーノを包囲し、ヴィスコンティ家を全面降伏の一歩手前まで追い込んだ。ところが勝利を目前にして、アルプスの彼方から恐るべき強敵が、この攻囲戦に突如介入する。バイエルンのルートヴィヒ４世が、ミラーノ救援のため、帝国軍を急遽差し向けたのである。この襲来によって、教皇軍はミラーノの包囲を解き、エミーリャ・ロマーニャ地方へ後退を余儀なくされた[29)]。教皇特使ベルトラン・デュ・プジェはそのエミーリャ・ロマーニャの要衝ボローニャを占拠し、以後そこを拠点に捲土重来を期すことになる[30)]。

帝国の空位を宣言し教皇の帝国代理を要求するヨハネス22世の一方的な主張を前にして、ルートヴィヒは当面ひたすら静観を保った。ドイツ国内で難敵フリードリヒ美王との対決が長引き、むしろ静観せざるをえなかったのである。ところが、1322年、ルートヴィヒは、突如、その態度を豹変させる。その年、ミュールドルフの決戦でルートヴィヒはハプスブルク軍を撃破してフリードリヒを捕虜にし、ドイツ国内に国王としての地位を不動のものとしたからである。翌年のミラーノ派兵は、反撃の狼煙であった。教皇軍の勝利を目前で阻んだこのルートヴィヒに対し、ヨハネスは激怒をあらわにした。清貧と無所有の理想を掲げてアヴィニョン聖庁の蓄財と奢侈を腐敗堕落と糾弾し教皇から異端宣告を受けたフランチェスコ修道会の聖霊派をルートヴィヒが庇護したことも、ヨハネスの怒りに火に油を注いだ[31)]。ヨハネスは単独支配者となったルートヴィヒの王権行使をなおも認めず、1324年、ルートヴィヒに破門を宣告した。ルートヴィヒも、負けてはいない。同じ年に、今度はルートヴィヒが、ヨハネスを異端として弾劾したのである。言葉による非難の応酬は、やがて実力行使に発展する。ドイツ国内に敵対する勢力がいないことを慎重に見定めたのち、1327年、ルートヴィヒはイタリア遠征に乗り出す。翌年、ルートヴィヒはローマに攻め上って、ローマ人民の代表から皇帝に戴冠され、さらにはヨハネス22世の廃位を宣言し、一介の修道僧をニコラウス５世として対立教皇にまつり上げた。ヨハネスがルートヴィヒによる皇帝権の行使を承認しないなら、ルートヴィヒもまたヨハネスによる教皇権の発動を無効としたのである。しかし、ルートヴィヒのイタリア遠征は、竜頭蛇尾に終わった。帝国領イタリアを転戦する中でいたずらに力を消耗し、その地にゆるぎなき支配と秩序を確立しえぬまま、1330年の初頭、ルートヴィヒは這う這うのていでアルプスの彼方へ去った。対立教皇に担ぎ出されたニコラウス５世も、時を置かずして自分の非を認め、アヴィニョンの聖庁にひれ伏す[32)]。こうして帝国における支配の正当性をめぐって教皇と皇帝が激突し、実際に戦火を交えたその死闘のまさに主戦場となったのが、帝国領イタリアであった。

６．ヨーハンのイタリア進出

ルートヴィヒ４世がアルプスの北へ去った1330年の暮、いまだ戦火の余燼がくすぶる帝国領イタリアに、チェコ国王ヨーハンは、勇躍、大胆不敵な一歩をしるした。その地における正当な支配権の帰属をめぐり熾烈な抗争がまさに火花を散らす最中に、その正当性をまったく欠いたヨーハンがルクセンブルク家の支配圏を構築する壮図に乗り出したのである。この危険で無謀な博奕を可能にしたのは、帝国領イタリアにおける諸都市の政治状況であった。

イタリアで11世紀後半以降に出現した自治都市コムーネは、周囲の農村地域から隔絶した商工業を営む都市住民だけの組織体ではなかった。イタリアでは経済活動が活発になると、商業に引き寄せられて周辺農村地域に居住する中小封建領主層が都市に移住し、また商業で富を蓄えた富裕商人層は都市の周辺地域に土地を購入した。このように都市は周辺農村地域と緊密な関係を保ちながら発展し、この点に、アルプス以北の都市と比べ、イタリアの都市の最大の特徴がある。そして、中小封建領主層と富裕商人層とが互いに交流し団結することによって生まれた政治組織体がコムーネであった。したがって、都市が周辺の農村地域から隔絶して都市住民が自分たちだけの共同体を形成したアルプス以北の都市と違い、イタリアのコムーネは成立当初から、都市が周辺に広がる農村部を領域とする都市国家として誕生した。ところで、古代ローマ時代末期に、これら都市のほとんどは司教が居住しその周辺領域を統括する司教区の中心であり、中世に入るとこの司教区の地理的範囲は伯が支配する伯領（コミターテゥス）の領域へとほぼ受け継がれた。コムーネが勢力を拡大するにつれ、コムーネの支配権が及ぶ範囲はかつてのコミタートゥス（司教区＝伯領）の領域と一致すべきだと考える風潮が12世紀後半に広く流布する。こうした風潮の下に、コムーネはコミタートゥス全域に支配権を拡大し、その域内の農村集落や封建領主を屈服させ、わけても封建領主には都市への移住を促した。これがコンタード征服で、都市域とそれに服属するコンタード（コミタートゥスに由来）は不可分の一体をなす政治単位とみなされ、都市がさらに勢力を拡大すると、この政治単位の外側に新たな従属地域が都市の支配領域に加えられていく。こうして形成された都市域（civitas）、コンタード（comitatus）、従属地域（districtus）という三つの領域の複合が、都市国家コムーネの基本構造となる。

アルプス以北では、封建社会という海原に浮かぶ孤島のように、周囲の農村から切り離された特殊な法共同体として都市が形成され、だから完全ではないにせよ封建勢力が排除され、都市住民は、貧富や法的権利に差はあっても、主として商工業を営む均質な社会階層で構成されていた。それに対し、イタリアの都市国家コムーネは、その成立と発展の過程から明らかのように、周辺の農村領域をも包含する広域組織体であり、したがって、その住民は、商工業者のみならず、土地所有者や中小封建領主などを含むさまざまな社会階層で構成されていた。しかも、商工業の発展にともない、商工業者の中でも、新たに財を築いた新興勢力が旧来の富裕市民層の地位を脅かし、同一の社会階層の内部でも新旧の勢力隆替が激しかった。このように均質ならざるさまざまな社会階層で構成されていたために、コムーネの内部では互いの利害対立から住民の間で抗争が頻発し、時にはコンタードでのフェーデ（自力救済、私戦）が都市内部にまで持ち込まれ、市内の騒乱に拍車をかけた。今日トスカーナのサン・ジミニャーノには多数の家門塔が聳えているが、中世においては、他の都市にも家門塔が林立し、こうした家門塔は自らの家門の勢力を誇示するた

め、あるいは、敵対する家門から身を守るために築かれ、家門塔の林立はコムーネ内部における抗争の激しさを象徴していた。

広く周辺の農村領域を含む都市国家コムーネは、前述のとおり、中小封建領主層と富裕商人層とが団結した自立的な政治組織体として誕生した。成立当初、これら上層市民から多くの場合は任期の短い複数のコンソリが選出され、コムーネの市政全般はこのコンソリの合議に委ねられた。しかし、商工業の発展にともなって新興勢力が抬頭し、コンタード征服の結果、農村領域から領主層が都市に流入してくると、互いに利害を異にする市民の間に亀裂が生じ、コムーネは次第に団結と融和を失っていく。有力市民は門閥を形成して互いに抗争を繰り返し、それに巻き込まれたコンソリが公正に利害を調整して市内の平和を維持することが困難になる。そこで12世紀後半に登場したのが、市民自治の原則には反するポデスタの統治である。ポデスタとはコムーネの外部から招請されたコムーネの最高指導者で、通常は法律上の知識に明るく行政的手腕にたけた身分の高い人物の中から選ばれ、行政・司法・軍事の最高指揮権をコムーネから委託された。絶大な権限を委ねられたため、ポデスタは任期が１年～半年と短く、再任は避けられた。任期終了後は、コムーネがその在職中の職務内容を厳重に審査し、権力が一身に集中するポデスタの専横を抑止した。ポデスタは本来市民の自治を侵害する単独支配者であり、短期にせよこうした外部出身の支配者に権力を集中させざるをえなかったところに、絶えざる騒乱に揺らぐコムーネの平和と安定への願いの切実さと、コムーネ内部に生じた社会的不和の根深さが表現されている。しかも、コムーネ内部の社会的軋轢はさらに深刻化し、単独者への権力集中もますますその度合いを強めていく。こうした混迷の時代に生まれたのが、シニョリーア制である。シニョリーア制が出現する13世紀後半～14世紀前半は、ドイツ王権の帝国領イタリア支配が有名無実化していく時代と重なる。ドイツ王権はコムーネの自治を侵害する危険な脅威であったが、その反面、コムーネ内部の騒擾を鎮め、コムーネ間の対立を調停しうる究極の裁判権保持者でもあった。ドイツ王権という重石の消滅は、コムーネという局地権力を凌駕するもっと高次の裁判権力の消失を意味したのである。強力な調停者を欠くまま、商圏や領土を拡大しようとするコムーネ同士が衝突し、有力なコムーネが中小のコムーネを武力でねじ伏せ併呑していく弱肉強食の時代が到来する。コムーネの存立を賭けた死活の争いを前にして、もはや内部抗争に明け暮れる余地はコムーネになく、強大な権力を一手に掌握した指導者の下にコムーネは時代の難局を乗り越えようとする。こうして登場するのが、コムーネの制度的枠組みを越えてその全権を掌握したシニョーレである。

シニョーレがコムーネを統治するこのシニョリーア制の出現は、コムーネの自治体制が事実上終焉を迎えたことを意味する。14世紀に入ると、イタリア北・中部には、シニョーレの地位を代々引き継ぐ有力家門が出現する。ミラーノのヴィスコンティ家、ヴェローナのデッラ・スカーラ家、フェッラーラのエステ家、マントヴァのゴンヅァーガ家などで、わけてもミラーノのヴィスコンティ家とヴェローナのデッラ・スカーラ家は帝国領イタリアで勢力を著しく拡大し、この地に二大支配圏を築き上げた。

チェコ国王ヨーハンが進出を目論んだ帝国領イタリアは、このような情勢下にあった。そこは、コムーネが分立割拠し、シニョーレがその内部で全権を掌握し、ミラーノとヴェローナの二大コムーネが中小コムーネの存立を脅かして武力侵略を企てるまさに分裂と争乱の巷であった。この不安定な政治情勢こそが、ヨーハンのイタリア進出を可能にし

た。帝国領イタリアにおける正当な支配権の帰属をめぐって教皇ヨハネス22世と皇帝ルートヴィヒ４世が激突したが、この争いに両者は決着をつけることができず、帝国領イタリアは依然として強力な支配者にして調停者を欠く権力の空白状態に放置された。この空白状態の中で、弱肉強食の餌食にされた中小のコムーネは、教皇や皇帝に代わる庇護者を他に求めざるをえない。そこへ登場したのが、チェコ国王ヨーハンであった。しかもヨーハンは、イタリアの秩序と平和の恢復を目指してイタリア各地を転戦した皇帝ハインリヒ７世の嗣子であり、ヨーハンに庇護を求めた人々はその父帝の事業の継続を願った。こうして、ミラーノとヴェローナの二大勢力圏に挟まれた中小のコムーネは、かつてコムーネ外部からポデスタを招請したように、シニョーレの地位を異邦人のヨーハンに託したのである。

ヨーハンに支配権を委ねたのは、ブレーシャ、ベルガモ、パルマ、クレモーナ、パヴィーア、レッジョ、モーデナなど、いずれもロンバルディーア地方とエミーリャ・ロマーニャ地方の中小コムーネで、これにフィレンツェの脅威にさらされていたトスカーナ地方のルッカが加わった[33)]。これら中小コムーネと敵対関係にあったミラーノもヨーハンに服したが、ヨーハンの意図が分からず探りを入れるためであったろう。所詮は面従腹背で、それはミラーノがのちにヨーハン打倒の中心となることから明らかである。

博奕のようなヨーハンのイタリア進出は、望外の大成果を収めた。一戦も交えずして、多数の都市がヨーハンの支配に服したからである。しかし、チェコ王国やルクセンブルク伯領のように、ヨーハンはその支配圏に一円的な領域支配権を打ち立てることはできなかった。帝国領イタリアにおいて正当なる支配権は、あくまでもドイツ王権に帰属するからである。ヨーハンは服属した個々のコムーネから別々にシニョーレの地位を委託されたにすぎず、したがって、ヨーハンの支配権は各コムーネから委託された個別のシニョーレ職の集積体だったのである[34)]。イタリア北部に進出したとき、その地に独立の王国を建設する意図は最初からヨーハンにはなかった。帝国領イタリアの支配者となるには、まずドイツ王国の王位を獲得する必要があった。

７．イタリア遠征の展開と帰結

教皇ヨハネス22世と皇帝ルートヴィヒ４世にとって、ヨーハンのイタリア進出はまさに青天の霹靂だったにちがいない。両者の合意なく、だしぬけに遂行されたからである。この寝耳に水の所業は、両者の逆鱗に触れた。帝国領イタリアの支配権をめぐって激突し両者の痛み分けに終わったところに、一介の野心家が突如乱入し、獲物を掠め取ったかたちになったからである。大成功のあとに、大試練がヨーハンを待ち受けていた。

ヨーハンの行動が教皇ヨハネス22世の神経を逆なでしたのは、ヨーハンの意図が分からず、教皇がそのイタリア進出について誤解したからである。ヨーハンのイタリア進出はルートヴィヒのイタリア退去と同じ1330年に遂行され、この二つがまったく別の意図の下でなされたにも関わらず、教皇の眼には、二つが共通の目的をもつ一つながりの連動する軍事行動と映ったらしい。つまり、ルートヴィヒとヨーハンは緊密に連携し、ルートヴィヒのイタリア遠征を今度はヨーハンが引き継ぐものと錯覚したのである[35)]。さらにその時、教皇はルートヴィヒ打倒の秘策を練っていた。事実上アヴィニョン聖庁の後ろ楯になっていたフランス国王フィリップ６世が帝国領イタリアに新しい王国を建設し、それを教皇が封土としてフランス王家に授けるという策略である[36)]。その究極の狙いは、

ドイツ王権と帝国領イタリアの結びつきを永久に断ち、イタリア北・中部を教皇の宗主権下に置くところにあった。ヨーハンの予期せぬイタリア闖入は、教皇のこうした構想を根底から覆すものだった。

短時日のうちに手に入れたイタリアでの支配権を確実なものとするために、ヨーハンはまず教皇ヨハネスの誤解を解きその支配の合法性を確保する必要があった。アヴィニョンの聖庁に使節団を送り込み、ヨーハンの目的が皇帝ルートヴィヒ４世の反教皇的策動とは無関係であることを表明させた[37)]。使節団の釈明は効を奏し、教皇はヨーハンに対する態度を変え、かねてよりのルートヴィヒ打倒の秘策を放棄した。こうしてヨーハンと教皇との合意がなり、1331年、イタリアに派遣されていた教皇特使ベルトラン・デュ・プジェとヨーハンとの間にピュウマッチオの協定が締結された。エミーリャ・ロマーニャ地方のパルマ、レッジョ、モーデナの支配権は教皇に帰属し、ヨーハンは誠実誓約をした上で教皇からこれら３都市を封として受け取ること。ロンバルディーア地方とトスカーナ地方では、教皇の同意なくして、ヨーハンはいかなる権力も役職も取得せず、ルッカは教皇の支配に引き渡すこと[38)]。以上が、協定の主な内容である。これによって、ヨーハンの行動は著しく制約され、帝国領イタリアにおいてヨーハンがさらに支配圏を拡大する機会は封じ込まれた。ヨーハンの勢力伸長に歯止めがかけられたとはいえ、ヨーハンと教皇特使軍が全面衝突する危険性は回避され、ヨーハンのイタリア進出でざわめいた帝国領イタリアの動揺は一時的に鎮静化した。

ヨーハンによるイタリアへの支配圏拡大は、教皇との間によりも、皇帝ルートヴィヒ４世との間に、さらに一層深刻な軋轢を生んだ。その軋轢の導火線となったのは、ルートヴィヒのイタリア遠征中にヨーハンが大胆に展開したルクセンブルク家の勢力拡大政策である。ルートヴィヒがアルプス以北にいない隙を故意に狙ったかのように、ヨーハンはポーランド王国からシュレージエン地方を奪い取り、得意の婚姻政策を駆使して、ニーダーバイエルン、ケルンテン、ティロールを矢継ぎ早にルクセンブルク家の勢力圏に取り込んだ。

そして今度は、イタリアへの勢力拡大である。あまりにも傍若無人で露骨な膨張政策は、さすがにルートヴィヒの許容しうる一線を越えた。ルートヴィヒの反撃は、素早く、大規模であった。ヨーハン膺懲の網を、ルートヴィヒはヨーロッパ全土に拡げた。ドイツ国内では、オーストリアのハプスブルク家、プファルツ伯、マイセン辺境伯、ブランデンブルク辺境伯がルートヴィヒに呼応し、イタリアではナーポリ国王が、東ヨーロッパではポーランド国王とハンガリー国王が、ヨーハン打倒に結集した[39)]。わけてもヨーハンにとって脅威だったのは、チェコ王国が四囲の敵による一斉攻撃にさらされたことである。こうしてヨーハンのイタリア進出は思わぬ大きな波紋をヨーロッパ全土に拡げ、ヨーハンを四面楚歌の窮地に追いやったのである。

こうした包囲網を打ち破るために、ヨーハンは八面六臂の外交を展開する。1331年、ルクセンブルク伯領から嗣子カールをイタリアに呼び寄せ、カールを国王名代に立ててその手にイタリア統治を委ねた。それから１年半余り、ヨーハンはイタリアを離れ、自身が獲得したルクセンブルク家の権益を守り抜くために、ヨーロッパ各地を東奔西走する。ヨーハンにとってまず優先すべきは、四囲から押し寄せてくる敵の攻撃からチェコ王国を死守することであった。実際にチェコ王国侵攻の軍勢を差し向けてきたのは、オーストリアのハプスブルク家とハンガリーであったが、両者の足並みが揃わず、ヨーハン自身が干戈を交えることもなく、交渉によって王国防衛を果たした[40)]。

しかし、ヨーハンに対する包囲網を切り崩すには、その中心にいた皇帝ルートヴィヒ４世との和解が不可欠であった。1331年、レーゲンスブルクで和解交渉が行われ、局面の指導権を握ったルートヴィヒは、硬軟両様の構えで、ヨーハンに譲歩と合意を迫った。この交渉におけるルートヴィヒの最大の狙いは、あまりにも強大になりすぎたルクセンブルク家の勢力を殺ぐところにあった。すでに交渉の前年、ルートヴィヒはハプスブルク家と密約を交わし、ヨーハンの次男ヨーハン・ハインリヒが継承することになっていたケルンテン公領とティロール伯領について、現在のケルンテン公ハインリヒの没後、ケルンテン公領はハプスブルク家が取り、ティロール伯領はヴィッテルスバッハ家が奪う取り決めをしていた。レーゲンスブルクの交渉で問題になったのはニーダーバイエルン大公領の問題で、その地を治めていたヨーハンの娘婿のハインリヒ２世に、ルートヴィヒは大公領を三分割してその二つをハインリヒの弟と従兄弟に譲ることを迫ったのである。その意図するところは、チェコ王国とイタリア北部を結ぶ陸の懸け橋となっていたニーダーバイエルン、ケルンテン、ティロールからルクセンブルク家の影響力を排除し、チェコ王国とイタリアとの連絡を完全に断つことであった。帝国内で孤立したヨーハンはやむなく譲歩し、娘婿に大公領の三分割案を受諾させた[41)]。しかしイタリア問題に関しては、むしろルートヴィヒは寛大であった。イタリアにおけるヨーハンの獲得分を帝国の抵当物件として扱い、12万フローリンを支払うことでその抵当物件をヨーハンが占有することにルートヴィヒは同意したのである[42)]。これは事実上ヨーハンのイタリア支配を容認したことを意味し、さらに、ルートヴィヒはヨーハンを帝国代理に任命した。その帝国代理を教皇ヨハネス22世も要求しており、ヨーハンに対するこうした破格の待遇の裏には、ピュウマッチオの協定で提携した教皇とヨーハンとの間に楔を打ち込むという、ルートヴィヒのしたたかな戦略があった。

敵の包囲網の中で悪戦苦闘を余儀なくされたヨーハンは、それに対抗しうる強力な同盟相手を必要とした。ルクセンブルク家にとって年来の同盟相手はフランス王家であったが、ヨーハンのイタリア進出以来、両者の関係はぎくしゃくして必ずしも良好だったわけではない。フランス王家がイタリア北部に独立の国家を建設しそれを教皇から封土として受け取るという教皇ヨハネス22世が思い描いた構想を、ヨーハンのイタリア進出が完全に打ち砕いてしまったからである。関係修復には、この問題を解決しなければならなかった。そこでヨーハンがフランスに赴いて締結したのが、1332年のフォンテーヌブロー協定である。その協定で、フランス王権はイタリア北部で王国を建設することを断念し、代わりに、ルクセンブルク家はフランス王権に奉仕してそのあらゆる敵と戦うことを義務づけられた[43)]。そして、この軍事同盟を強化するために、フランス国王フィリップ６世の嗣子ジャン（のちのフランス国王ジャン２世）とヨーハンの次女グータとの結婚が取り決められた。この協定は、フランス王家に対してルクセンブルク家が一方的に軍事奉仕を義務づけるもので、しばしば傭兵協定と悪罵を浴びせられることもある。しかし、イタリア北部にフランス系国家が建設され、その結果、ドイツ王権と帝国領イタリアとの結びつきが永久に断たれることを、ヨーハンの外交的努力が阻止した意義は大きい。こうしてフランスとの同盟は強化され、フランス王家の金銭的支援を得て、ヨーハンは大軍を集め、1333年、再びイタリアへ乗り込んでいく。

イタリアの政情は混乱を極めていた。ヨーハンがアルプス以北で華々しい外交を展開している間に、帝国領イタリアではコムーネがルクセンブルク陣営と反ルクセンブルク

陣営に分裂し、激しい抗争を繰り展げていた。国王名代を託されたカールがサン・フェリーチェ城砦前の戦いで勝利を収め（1332年）、ルクセンブルク陣営の崩壊をかろうじて食い止めていたものの、中小コムーネが次から次へと反ルクセンブルク陣営の軍門に下り、ルクセンブルク陣営は次第にじり貧状態に追いつめられていった。そもそも帝国領イタリアにこうした騒乱を引き起こすきっかけとなったのは、ヨーハンが教皇特使ベルトラン・デュ・プジェとの間にピュウマッチオの協定を締結したことであった。ヨーハンがイタリア進出に乗り出す以前に、教皇特使と激しく敵対していたシニョーレやコムーネが、この協定で一斉にルクセンブルク家に背を向け、1331年、ヨーハンがアルプスの彼方に去った直後、反ルクセンブルク同盟を結成して戦火の火蓋を切った。この反ルクセンブルク同盟に結集したのは、ミラーノ、ヴェローナ、マントヴァ、フェッラーラ、フィレンツェ、ナーポリ王で、いずれも中小コムーネを併呑する好機を窺う強大なコムーネや君主であった。それに対し、ルクセンブルク陣営に踏みとどまったのは、パルマ、モーデナ、レッジョ、クレモーナ、ルッカなど、強大なコムーネの脅威にさらされた中小のコムーネだった。したがって、ルクセンブルク陣営と反ルクセンブルク陣営の戦いは、ルクセンブルク家に指揮を仰ぐ中小コムーネの連合軍とそれら獲物を狙う大コムーネの連合軍との戦いだったのである。

戦局が反ルクセンブルク同盟の勝勢に傾きつつあったところに、フランスから大軍を率いてヨーハンがカールの許に着陣した。この大軍を迎え撃つ反ルクセンブルク同盟軍が採った作戦は、極力野戦を避け、ヨーハン軍を城砦や都市をめぐる攻防戦に引きずり込み、できうる限り戦いを引き延ばすことだった。戦いが長引けば、遠征軍は疲弊し、戦場を離脱する兵士も現われ、さしもの大軍も自壊せざるをえない。決定的な勝機を掴みえぬまま、ヨーハンの戦費は底をついていった。こうした消耗戦に決着をつけたのが、フェッラーラ近郊における教皇特使軍の大敗である。この敗北で教皇特使は戦線を離脱し、帝国領イタリアにおける軍事的均衡は急速に崩れていった。ヨーハンの軍勢だけで戦線を維持することはできず、1333年の秋、ヨーハンはアルプスの彼方へ撤退することを決意する。

多大な労力を費やしたにも関わらず、ヨーハンの野望はこうして潰えた。父帝ハインリヒ７世が失意のうちに客死した地で、ヨーハンもまた手痛い蹉跌を味わうことになった。この野心家が去ったイタリアの地には、強力な庇護者を失った中小のコムーネがよるべなく残された。これら中小のコムーネは、弱肉強食の過酷な運命に翻弄されながら、貪欲に牙を剥く強大なコムーネの前に投げ出され、やがてその牙の餌食になっていくであろう。ルクセンブルク家には、フランス王家への軍事奉仕を義務づけたフォンテーネブロー協定が残された。協定締結から14年後、両目の視力を失ったヨーハンは、この義務を果たすべく嗣子カールを伴ってクレシーの戦場に立つ。その地で英仏両軍が激突する只中、波乱万丈の人生を送ったこの盲目王は、戦場の露と消えていく。

註

1）イタリア中世都市コムーネの支配に服した都市の周辺領域。

2）1332年11月25日。

3）午後３時。

4）ラテン語原文では galeatus で「兜をかぶった」という意味であるが、この翻訳では中世ヨーロッパの軍事的環境を考えて、この語をすべて「甲冑兵」という訳語で統一した。

5）ルッカとピストーイァとの間にある渓谷。

6）ルッカから30キロメートルほど北のアッペン

ニーノ山脈中にあり、ポー川流域とトスカーナ地方を結ぶ要衝地域。

7）ベルトラン・デュ・プジェ（1280頃～1352年）。フランスのカオール近郊の出身で、アヴィニョンの教皇ヨハネス22世の甥。1316年にヨハネスによってサン・マルチェッロ名義教会の司祭枢機卿に、1327年にはオスティアの司教枢機卿に任じられた。1319年に教皇特使として北イタリアに派遣され、教会国家再建のために、ロンバルディーア、エミーリャ・ロマーニャの各地で皇帝派（ギベッリーニ）の諸都市と抗争を繰り返した。1327年からボローニャに居を構えたが、第6章で語られように、1333年に決定的な敗北を喫し、最後には市民の反乱でボローニャ市を追われ、アヴィニョンに退いた。

8）ヨーハンに随身してイタリア半島に下り、そのヨーハンによって、1332年7月から半年間、モーデナ市のポデスタに任じられていた。ポデスタとは、中世イタリアの都市国家コムーネで、都市外から招かれ、6か月もしくは1年に限って、行政権・司法権・軍事指揮権などを委託された執政官。

9）ジャン・ド・モリニで、1313～1347年にボーヴェ司教。1329年以来、フランス国王フィリップ6世の尚書の職位にあった。

10）ラウル3世で、1302～1341にウー伯。

11）ヨーハンが、パルマに到着したのは、1333年2月26日。

12）パヴィーア包囲戦が始まったのは、1333年3月15日。

13）カールがパルマ市に帰還したのは1333年3月28日。

14）カールの記述によると、父王ヨーハンと教皇特使ベルトランとの協定は1333年のベルガモ奪取作戦失敗後に締結されたように描かれているが、実際には、両者の協定締結は、ヨーハンが北イタリア諸都市を支配下に収めた直後の1331年4月のことである。

15）ジャン1世(1311～1373年)。イタリアでヨーハンに仕え、後述される1333年のフェッラーラの戦いで敵の捕虜となる。1335年に身代金と引き換えに釈放され、その後、フランス国王に仕えて、いわゆる英仏百年戦争では、フランス軍の指揮官の一人として、イングランドのエドワード黒太子と戦った。

16）1333年5月23日。カールはこれよりひと月前に、クレモーナ市に向けて兵を進めていた。

17）ピッツィゲットーネ城砦は、1123年にクレモーナ市によって築かれた。

18）1333年6月3日。

19）フェッラーラの戦いが起きたのは、1333年4月14日。

20）ヨーハンがこの決定を下したのは、1333年10月のことである。

21）『神聖ローマ皇帝カール4世の自叙伝』第4章。

22）Jőrg K.Hoensch, Die Luxemburger, Stuttgart, 2000, S.69.

23）Reihard Härtel, Die Italienpolitik Johanns von Böhmen. in ; Johann der Blinde, Graf von Luxemburg, König von Böhmen, 1296-1346. Hrsg. von Michel Pauly, Luxemburg, 1997, S.365.

24）Rolannd Pauler, Die deutschen Könige und Italien im 14. Jahrhundert, Darmstadt, 1997, S.165.

25）『神聖ローマ皇帝カール4世の自叙伝』第4章。

26）Guillaume Mollat, The Popes at Avinyon 1305-1378, Translated by Janet Love, New York, 1963, p.77.

27）ibid., p.89.

28）Adolf Lehleiter, Die Politik König Johanns von Böhmen in den Jahren 1330-1334, Tübingen, 1908, S.1.

29）Guillaume Mollat, op.cit.,p.93.

30）ibid., p.99-100.

31）ibid., p.94.

32）『神聖ローマ皇帝カール4世の自叙伝』第4章。

33）同上

34）Reihard Härtel, op.cit., S.371.

35）Guillaume Mollat, op.cit.,p.104.
36）Jőrg K.Hoensch, op.cit., S.79.
37）Guillaume Mollat, op.cit.,p.105.
38）Rolannd Pauler, op.cit., S.166.
39）Jőrg K.Hoensch, op.cit., S.79.
40）ibid., S.83.
41）ibid., S.78-79.
42）ibid., S.80.
43）ibid., S.80-81.